

教養教育の役割をめぐって

尾 関 英 正

(1) 変わる学生と教養教育

最近、教養教育の意義が改めて取沙汰されるようになってきたが、その捉え方はかつての教養に対するものとは少し違ってきたようである。増田四郎は、著書『大学でいかに学ぶか』の中で「大学に入ったら、小説や詩を読んだり……哲学の本に頭を突っこんだりというふうに、あっちこっちを歩き回ってみる。それは一種の精神的遍歴ですが……ほんとうは必死な気持ちで、自分の力と自分の性格にびったりしたなにかをさがす。このことがたいせつではないか¹⁾」と教養教育の重要性について述べている。しかし、こうした考え方はもう遠い昔のことなのであろう。

合理性が優先される昨今、苦勞を承知で、わざわざ何かに挑戦してみようとする気概のある学生も少なくなってきたように見える。実際、多くの学生に共通している傾向を挙げるならば、おおよそ次の三点に絞られよう。一つ目に「好きなことはしても、嫌なことは絶対にしない」、二つ目に「あまり本は読まない」、三つ目に「厄介で、面倒なことは避けたい²⁾」などである。こんな特徴から人物をイメージすると、どんな印象の学生になるのだろうか。いみじくも、坪田まり子は、『大学教育と進路選択 5号』で「昨今の学生と接して私が感じることは、“なんとなく大人しい学生が増えたかしら”³⁾ということです」と指摘している。

こうした特徴は、しかし採用する企業側から見ると、まったく逆の厳し

い表現になってくる。高等教育研究会の調査によると、「①やる気や学ぼうという意欲が不足している、②文章の『読み書き能力』の不足、③何が問題かを見つけ解決する力が弱いなど、総じて思考力、判断力、表現力が低いという点が企業から厳しく指摘されている⁴⁾」という。当然、大学もこうした指摘に応えられるような対策を考えていかざるをえないが、元来この点こそ教養教育で学生が自ら学びとっていくべきところであり、かつての学生にはその心づもりがあったように思われる。

現在は、その対応策として、初年次教育（読み書き算数）、基礎学力の向上、さらに出口対策としてのキャリア教育などにも取り組んでいくことになってきた。もちろん、これらの科目は教養科目に組み込まれてはいても、本来は別ものであり、逆に教養教育としての間口を狭めてしまうことにもなりかねない。その意味では、痛し痒しではあろうが、このことが、また一方で受験生の大学選択の重要な条件になっていることも事実なのである。果たして、大学における教養教育とは何なのか、さらにはその役割をどう捉えたらいいのかなどについて、改めてここで考えていくことにしたい。

(2) 実践的になる教養科目

2008年3月19日、東京新聞の『読者交論』に次のような記事が掲載された。「社会の“幼児化現象”が指摘されて久しいが、その“若い高校生”が、数字の上では全員、大学に入学できるのである……今の“大学”の多くは、“大学”にして『大学』にあらず。短大や専門学校と同じ就職準備学校であり、一部を除いて、『学問』などとは縁遠い存在だ」という内容である。六十代後半の男性読者からの投稿だが、この世代からすれば、ある種の不甲斐なさを感じざるをえないのであろう。

この幼児化の現象は、常々言われてきたことだが、その責任は学生だけにあるわけではないのである。確かに、学生が、「予習をしてこない」、指名されても「簡単に分かりません」と答え、「すぐに辞書を調べることさ

えない」ような状態が、特別ではなくなってきた。ましてや、数理系の授業などでは、状況は推して知るべしであろう。しかし、そうは言え、とくに学生が斜に構えているわけではなく、どうも学ぼうとする意欲や理解しようとする学力が、総じて弱くなってきたのではないかと思われるのである。十年ほど前、知識偏重の受験制度が批判され、新たに「ゆとり教育」なるものが推進されてきたが、その方針の下で育った世代が、今大学に入学する年齢になった。その影響に、さらに全入時代が拍車をかけることになったのであろう。

こうした状況の中で、学生の基礎学力の低下はやむを得ないことだとしても、当然その一方で、学力の向上を図る対応策が必要になってくる。今、本学でも、入口対策として基礎学力試験の実施、それに基づく履修指導、そして初年次教育科目の『オリエンテーション・ゼミ』（レポートメーキング）『情報リテラシー』、それに『文章表現』などが置かれている。これらの科目には、どう見ても補習教育に近いものや、本来教科の中で自ら学んでいくべきものまで入っている。この傾向は、時代の趨勢で避けられないのであろう。

さらに、学生たちは就職氷河期に育ったせいもあってか、安定志向の傾向が強い。主体的に学ぶというより、マニュアル化された知識や技能を身につけたがる者が多くなってきている。大学への入学理由も、1)に「就職に有利である」、2)に「学ぶ内容や実習・カリキュラム制度に魅力がある」、3)に「資格取得に有利である」と極端に就職面⁵⁾に偏っている。実際、本学でも、キャリア関連科目の中の『人生と進路選択』など、実践マニュアル的な科目に人気が集まっているのもその証となろう。

こうなると、いわゆる学術的な教養科目への関心が低くなってくるのは当然のことであり、意欲のない学生は、「予習をしてこない」ところか、「居眠り」をしたり、「トイレに出かけたり」するようになる。しかし、何としてでも意欲の回復と学力の向上を図ろうとするならば、ただ一重に教授法の改善に期待をかけるしか方法はないであろう。さもないれば、教養

科目が非教養的な内容へと変質していくか、学生の望む実務的・実践的な科目が拡大していくことになり、大学はまさしく「専門学校と同じ就職準備学校」になりかねないのである。

(3) 社会力も先ずは教科から

多くの学生に共通して見られる傾向の一つに、「好きなことはしても、嫌なことは絶対しない」という特徴があった。この言葉は、自分はもちろん、他人の場合にも当てはまることで、学生たちの友人関係をもよく表しているように思われる。彼らの係わりについて、新村洋史は、「その時々

の雰囲気に合わせて明るく軽く、＜ノリ＞が良くなければいけない。人に忠告をしたり、批判したりすることは人格を傷つけることになるし、自分も傷つけられたくないから批判的なことは言わない」と述べ、これを「仲間集団のなかの自我・人格が交錯しない空虚な人間関係⁶⁾」と呼んでいる。

個人主義が重んじられ、付き合いも表面的になりかねない今の世の中、人々は人格の交錯を嫌って、人間関係をあえて築き上げたいとする思いや気持ちが、薄らいでいるのではないだろうか。本学の学生の場合も、先輩や同級生たちとの友人関係をつくる機会は、唯一「出会いの広場」か「課外活動団体」でしかないと聞く。では、この希薄な人間関係の中で、学生たちはどのようにして自分の意見を持ち、社会に係わっていく自己を確立していくことになるのだろうか。坪田によれば、「アルバイトやボランティア活動を通して、社会性を身につけることができるはず⁷⁾」と言う。

社会性を身につけるためとはいえ、しかしそのために今の学生がみなアルバイトやボランティア活動をするとは思えない。こうしたものは、元来副産物として学び取っていくものであり、あえて目的とすることではないように思われる。かつては、生活のためやむなく学生もアルバイトをしたものの、そのためではなかった。だとすれば、今の学生が、社会性を身につけるためにアルバイトなどしないことは明らかである。問題はという

形で身につけていくかということであって、社会参加の意識だけを取り上げれば、学生にもその気持ちは大いにあると言っていい。

例えば、朝日新聞の『社会参加意識世論調査』（1999年12月10日）の結果も、このことをよく示している。設問1）の「あなたは社会の役に立ちたいという気持ちがありますか」に対する回答は、「大いにある」「ある程度ある」で、合計82パーセント。「全然ない」「あまりない」は、両方合わせても17パーセントであり、圧倒的に多くの人々が社会の役に立ちたいと感じていることが分かる。設問2）の「どんなことで社会の役に立ちたいですか」の回答は、「身近な人を支える」「一生懸命働く」に続いて、「ボランティア活動⁸⁾」であった。

幸いに、社会性を身につけるために、学生は自ら世間に飛び出す必要はなく、本学にはそのための科目がすでにいくつか用意されている。例えば、『ボランティアワーク』『ボランティア論』『街づくり未来塾』など、いわゆる社会力を向上させる科目が設置されていて、希薄な人間関係にある学生たちに、改めて主権者としての意識を目覚めさせる機会を提供している。こうした種類の科目も教養科目ではあるが、学修を社会参加に直接つなげていく典型的な教科と言えよう。人間関係が希薄になっている現代では、こうした機会を通して自助協力の精神を学んでいくことがますます重要になってこよう。

(4) 学修する力こそ教養なり

この数年間、入学してくる学生について感じていることの一つに、彼らの発想が情緒的になっているということがある。受験生の面接をする際、いつもきまって同じ思いにさせられてきた。例えば、面接を受けている学生に、「今、社会問題で何に一番関心がありますか」と質問すると、彼らはハッキリした口調で関心の対象を言う。「それでは、そのことをどう考えますか」と訊ねると、何も答えてくれない。このことがいつも

気になっていた。「本当は関心などないのでは」とも考えたが、徐々にそうでないことが分かってきた。

彼らは、高校時代にマニュアル化された知識や技術の習得に明け暮れる毎日を送ってきたためであろう。世間で起きている問題を自分に引き付けて考える、あるいは自分の生き方に照らして考えてみることができないのである。一見なんでもないことのようにだが、そうした形で考えたことがないというのが実態である。従って、学生たちの意見はどちらかという印象的なものになるケースが多い。増田は、大学で勉強する狙いについて、「非常に広い意味で、一貫した立場、ものの考え方によって……周辺に生起するさまざまなできごとの意味を、統一的にとらえる、そのとらえ方の練習にある⁹⁾」と述べている。

確かに、「統一的にとらえる」ことができるようになることは、何より重要であるが、これは自らの人間観、世界観に通じることであり、まずは自分の考え方(判断基準)を確立していくことが必要となろう。新村によると、こうしたことを授業で学修していく場合、次のような手順を踏むのがいいという。1) 自分の頭で「問う」、2) 「自分にとって」「人間にとって」「人類にとって」という観点から考える、3) 「対話や討論……など共同体の関係をとおして自分の意見を」つくり、自分や世界が存在する意味を改めて問い直し、答えを見つけ出し¹⁰⁾ていく。

この学修の方法は、講義を聴く場合でもまったく同じである。いろいろな講義を聴くとき、それがどんな立場で語られているのか、さらには自分にも納得できるものかどうかを常に考えながら聴いていく。まさに「対話や討論……をとおして」の部分である。従って、講義されていることは、一つの観方に過ぎないから、自分の考えと違っている場合には、自らの考え方をぶつけたり、自ら問い直したりすることも必要であろう。さらには、分野の違うさまざまな講義を聴くことは、新たな発想や考え方に出会う貴重な機会でもあり、広い視野のもとで自らの考え方を見つけ出ししていくチャンスでもある。

こう見てくると、学修するとは、はじめに問題を提起し、それが自分や社会にとってどうあるべきかの議論のあと、自らの意見を構築していくことであり、さらにこれを一貫した観方として自分の考え、生き方にも投影させていくことである。教養を身につけるとは、まさにこのことであり、この学修がなければ、生き方、社会力なども浅薄で弱いものになってしまうであろう。その意味で、教養教育とは、「学修する力」の育成であり、学術的な教養科目こそ、その核となるもの（不易）である。これに対して、実践的な科目は、時代に即して変わるもの（流行）であり、必ずしも本質的なものではないと言えよう。

注

- 1) 増田四郎著『大学でいかに学ぶか』講談社現代新書、東京、2003年、22頁。
- 2) この特徴は、一般的によく聞き、体験するところでもある。新村洋史氏も『大学生が変わる』（新日本出版社、東京、2006年）で、同じような特徴を指摘している。
- 3) 坪田まり子著『個性の上に社会性を身につけることの意義』（宇佐見義尚編『大学教育と進路選択5号2006』所収）亜細亜大学キャリア委員会、東京、2007年、85頁。
- 4) 新村洋史著、上掲書、12頁。
- 5) リクルート『＜進学ブランド力調査＞2007』（『カレッジマネジメント147/Nov. - Dec. 2007』所収）東京、2007年、10頁。
- 6) 新村洋史著、上掲書、20頁。
- 7) 坪田まり子著、上掲記事、85頁。
- 8) ここでは、朝日新聞（1999年12月10日）の『社会参加意識世論調査』結果を利用した。原稿執筆後の2008年4月12日に内閣府が発表した『社会意識に関する世論調査』によれば、「何か社会の役に立ちたい」とした人が、69.2%で、昨年より6.6ポイント増加した。逆に、「あまり考えていない」とする回答は、28.5%で、昨年より6.4ポイント減少し、過去最低となった。ここでも、多くの人が「社会の役に立ちたい」と考えていることが分かる。
- 9) 増田四郎著、上掲書、17頁。
- 10) 参照、新村洋史著、上掲書、197頁